

# 御鑄物師会と天明鑄物

(財)素形材センター 板谷 憲次

## はじめに

9月20日、まだ真夏の暑さが続く中、栃木県佐野市において、“第16回御鑄物師会”が行われた。筆者はこの現在の御鑄物師会の復活に携わり、その第1回及び第2回には事務局として参加していたが、今回が18年振りの参加であった。今は、御鑄物師会の事務局を(社)日本鑄造協会が担っているが、当初は復活の経緯もあって、通商産業省鑄鍛造品課(当時)が担い、その後しばらくは(財)素形材センターが担当していた。

本稿では、現在の御鑄物師会復活当時を振り返るとともに、御鑄物師会への期待等について述べたい。

## 御鑄物師とは

わが国の鑄物造りは、出土した鑄型の年代推定等から、弥生時代中期(紀元前1~紀元1世紀)頃であろうと推測される。また、その鑄物造りの技術は、北九州あるいは能登か敦賀を經由して中国大陸から伝播したものであると考えられている。そして、6世紀にわが国に仏教が伝来し、国家的宗教となった結果、わが国における鑄物造りは寺院建築や仏像・仏具の製作で活発になり、飛躍的な発展を遂げたとされている。

御鑄物師は、6世紀頃、鑄物造りの技術を身に付けて大陸から日本に渡ってきた渡来人がそのルーツであると言われている。その卓越した鑄物造りの技術は、時代の移り変わりの中で、特別な技術・技能として、親から子へ、子から孫へと受け継がれ、専門家集団を形成していったものと思われる。「鑄物師」はその名前のとおり「鑄物をつくる職人」であり、「鑄物師」の前に「御」を冠した「御鑄物師」は、特別な職として、社会の尊敬を受け、時の権力者等に厚遇されたことを示している。それが「勅許御鑄物師」の称号であろう。「勅許御鑄物師」は、今から850年ほど前に、宮中の魔除けの吊り灯籠の製造に携わり、公用の鑄造が許された108人の鑄物技術者集団と言われている。勅許御

鑄物師、あるいはその後裔は、全国各地に散って、その地域の鑄物業の中心として、その高度な技能・技術を匠(たくみ)の技として、代々受け継いで来たと思われる。また、技術や技能だけでなく、“伝統を意識し、鑄物を大事にする気風”という、わが国の財産と呼べる精神風土も伝えてきたのである。しかしながら、伝統と気風だけでは、昨今の経済環境の中では厳しいものもあり、現在も鑄物業を営んでいるのは全国に20数社となっている。

## 御鑄物師会の復活と開催経緯

現在の「御鑄物師会」は昭和63年4月に第1回を開催した。“現在の”というのは、開催の旗振り役となった橋本久義 通商産業省鑄鍛造品課長(当時)が課長補佐をしていた筆者に、「御鑄物師会というのが昔あったらしい。御鑄物師の伝統を継いでいる鑄物屋さんに集まってもらって、この会合を復活しよう。すぐやろう。」と言ったことによる。かつてあったという御鑄物師会については、その開催内容、メンバー等について、残念ながら確認できていない。しかし、その後集った御鑄物師に関する情報からみて、全国規模かどうかは別として、そうした“集まり”があったのは確からしい。

いずれにせよ、橋本元鑄鍛造品課長の指示で、わずか2~3ヶ月の準備期間で第1回を開催したように記憶している。第1回は新日本製鐵(株)にお願いして都内の寮をお借りし、「伝統ある鑄物造りの技術を支えてきた御鑄物師の人々が、日本の鑄物についてお互いに語り合う」場としての御鑄物師会発足の意義や今後の進め方等について意見交換を行った。まだ、全国の御鑄物師の情報が不十分で出席は11名にとどまったが、会長には濱鐵夫氏(故人)、副会長には岡本太右衛門氏(現御鑄物師会会長)を選出し、より多くの御鑄物師への呼びかけを行い、会員の充実(御鑄物師の名簿整備)に努める等の方針が決った。また、この時、

次回以降は会合だけでなく御鑄物師に関わりの深い旧跡の視察や伝統ある製造現場を訪問するといった以後の活動の基本的な進め方もとりまとめられた。

第2回はほぼ1年後の平成元年7月に、会員である吉年可鍛鑄鉄(株)の吉年社長の協力を得て、大阪・河内長野で“大保の鑄物師”の史跡の視察と懇談会合を行った。1回目から会員増加があったかどうかについては記憶が定かではないが、記録によれば筆者を含めて15名が参加したとある。そして、事務局については、第3回以降は、当時の通商産業省鑄鍛造品課から(財)素形材センターに移管することで関係者の了解が得られていた。

第3回は平成2年に岐阜で開催され、濱会長と岡本副会長(当時)が烏帽子直垂姿で“鑄鉄製禁裏御用釣灯籠”を岐阜市長に贈呈した。マスコミが初めて御鑄物師会を取り上げたのはこの時である。第4回以降もほぼ毎年御鑄物師ゆかりの地を訪問、交流を図ることによって、鑄物に対する情熱を相互で高めあってきており、平成13年からは隔年開催となったものの、本年の開催で16回を数えるに至っている。

### 第16回御鑄物師会、佐野・天明鑄物

第16回の御鑄物師会は、9月20日、13名の参加をもって、残暑の厳しい栃木県佐野市で天明鑄物に関する史跡の訪問を中心に実施された。

参加した会員は、

芦澤亮夫 (株)ヤマトインテック代表取締役社長

金森 勇 (株)金森合金代表取締役社長

田中義宏 (株)田中鑄造所代表取締役社長

辻内倫夫 辻内鑄物鉄工(株)代表取締役社長

広瀬 尙 ヒロセ合金(株)代表取締役社長

の5名であり、また、急遽、参加できなくなった岡本太右衛門(株)岡本代表取締役会長の代理として、同社の堀江尚男常務取締役が加わった。さらに、新日本製鐵(株)、(株)神戸製鋼所、高沢産業(株)からの参加もあった。業界団体からは、事務局である(社)日本鑄造協会と(社)非鉄金属鑄物協会、そして(財)素形材センターが参加した。現地側では、佐野鑄物工業組合の栗崎二夫理事長(栗崎鑄工所社長)、天明鑄物研究家の高橋久敬先生らが参加、懇切丁寧な対応をしていただいた。

下野国佐野天明(栃木県佐野市)の地で作られた鑄物あるいは佐野の鑄物師によって作られた鑄物が天明(古くは「天命」と表記)鑄物と呼ばれている。

天明鑄物は平安時代中期の天慶年間(934~947)に河内国丹南(大阪府)から5名の鑄物師が移住し、藤原秀郷の命により兵器類を鑄造したのが始まりと伝えられているが、出土品等からはそれ以前から土着の鑄工による鑄物製造が行われたものと推定されている。天明鑄物は、有名な茶の湯釜をはじめ、烏居、梵鐘、燈籠、釣燈籠、仏像、鰐口や多宝塔、そして鍋、釜、鋤、鋏といった生活用具まで、多くの種類の作品が残されている。これらは、地元佐野市や栃木県内はもちろん、関東各地や東北地方、遠くは京都にも残っているとのことである。

天明鑄物の最盛期は室町時代から江戸時代初期といわれている。特に、茶道が隆盛を迎えた安土桃山時代には、天明鑄物の茶釜は、九州・福岡県の芦屋町産の茶釜と併せて、「西の芦屋、東の天明」と並び称され、もてはやされている。芦屋釜は地肌が滑らかで地紋が鮮麗なのに対し、天明釜は寂びた肌合いに素朴で力強い造形という特徴を有している。江戸時代の釜の鑑定控えには、「上作の天明釜は、大判金で50枚程」との記述もあるとのことである。また、天明鑄物師を有名にしたエピソードの1つが、京都・方広寺の「国家安康」の梵鐘の鑄造であり、数千人といわれている全国の鑄物師とともに、佐野からも39名の天明鑄物師が参加し、脇棟梁を務めたとのことである。

第16回御鑄物師会としての日程は、

- (1) 佐野・天明鑄物史跡等視察(佐野市郷土博物館、赤城神社・銅造烏居、星宮神社・銅造烏居、惣宗寺・銅鐘、観音寺・銅阿弥陀如来像)
- (2) 天明鑄物師・若林鑄造所訪問
- (3) 高橋久敬先生の「天明鑄物の歴史等」の講義及び意見交換
- (4) 参加者懇談会

で、全行程8時間程の強行スケジュールであった。

#### (1) 佐野・天明鑄物史跡等視察

##### ①佐野市郷土博物館

佐野市郷土博物館は、玄関左手の田中正造の銅像に象徴されるように、佐野市の生んだ偉人・田中正造に関係する資料と佐野市の原始から近現代への流れが展示された博物館である。一角には、天明鑄物に関する展示コーナーがあり、天明鑄物の歴史等を垣間見ることができる。当地の鑄物造りの基盤を築き上げた御鑄物師の「幟」は、話には聞いていたが筆者自身初めて

眼にするものであった。

#### ②赤城神社・銅造鳥居

明和6年(1769)、天明の鋳物師である丸山善太郎毎昭、丸山甚太郎易親によって造られた高さ4.5mの美しい稲荷鳥居である。左右の柱には神主、願主、鋳物師名が刻まれている。佐野市の指定有形文化財である。木立に囲まれた閑静な環境の中で、鳥木を大きく突き出した力強さは、堂々たるものである。



写真1 赤城神社・銅造鳥居を見る一行

#### ③星宮神社・銅造鳥居

享保20年(1735)、天明の鋳物師たちが造り、天明町の氏子が奉納した鳥居で、形式からは代表的な神明鳥居である。柱からの貫や鳥木の突き出しが短く、鳥木の反りも低いため一見小さく見えるが、高さ4.2mと堂々としたものである。銘には「願主天明町惣産子享保二十乙卯年三月吉日金屋町新町惣鋳物師棟梁大工職」とある。



写真2 星宮神社・銅造鳥居

#### ④惣宗寺・銅鐘

明暦4年(1658)、天明鋳物師たちが菩提寺に寄進した、総高約146cm、口径約90cm、重さ約1,125kgの大鐘である。

写真でははっきり見えないが、鐘を吊るしている竜頭は、竜の子である蒲牢の形をとり、首で吊るすという類例のないものということである。また、乳は5列、

5段、100個で非常に大きく、撞座は八葉素弁の重ね合わせた形を取っている。縦帯中帯の交差部は輪宝、下帯の宝相華も良く鋳出され、天明鋳物師の鋳造技術の高さを示す梵鐘である。鋳造には鋳工100余人が力を合わせたとされている。

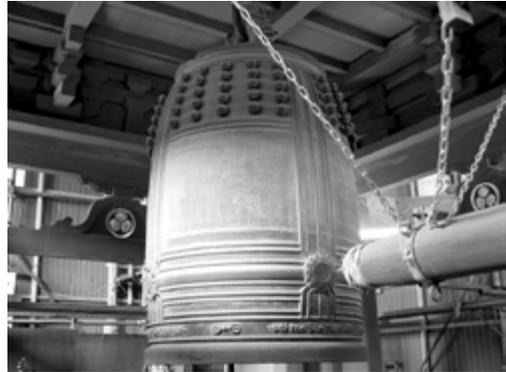


写真3 惣宗寺・銅鐘

#### ⑤観音寺・銅造阿弥陀如来座像

寛文9年(1669)に造られた、十二葉大蓮華座に結跏趺坐し、阿弥陀定印を結ぶ露座の大仏の阿弥陀如来座像である。全高は313cm、容姿端麗、かつ力強さを有する座像である。



写真4 観音寺・銅造阿弥陀如来像

#### (2)天明鋳物師・若林鋳造所訪問

若林家は弘化3年(1846)創業の天明の鋳物師である。現当主の若林秀真氏は第5代で、創業160余年となる。毎日、茶器・花器等の製作に励むとともに、東大寺に茶の湯釜を納めたのをはじめとして、近隣の神社仏閣に銅鐘や神鈴、手水鉢龍口、大鰐口等多数の製品を納めている。

若林鋳造所は、閑静な住宅街の一角にあり、天明鋳物の技術と伝統を受け継いだ仕事場は、鋳物工場とい

うより美術工芸品の製作現場というにふさわしく端正に片付けられていた。

古い型型炉は今でも使用できるのではないかと思える状態であり、また、鞆など古くからの道具も物置場に状態もよく保存されていた。現在は、るつぼ溶解によって美術工芸品を造っているとのことで、技術・技能を確実に引き継いでいる天明の鋳物師の伝統を感じた。

1000年の伝統の天明の鋳物師も次第に少なくなっていると聞いていたが、若林氏が今後もその伝統を受け継いで温故知新に心掛け、自然体のものづくりに精進したいと話されたことは大変印象的であり、わが国の“心を込めたものづくり”の伝統はこの地でも脈々と生きていることを実感した。



写真5 天明鋳物師・若林氏(左)と一行

### (3) 高橋久敬先生の「天明鋳物の歴史等」の講義及び意見交換

天明鋳物研究家である日本古鐘研究会会員の高橋久敬先生から天明鋳物についての講話を聞いた。高橋先生の話は、天命と天明の呼称の経緯にはじまり、天明鋳物の歴史、天明の鋳物師の住んだ町並みの話、そして天明の鋳物師たちの各地への移住の歴史にまで及んだ。天明鋳物師たちの最盛期の町割や、天明鋳物師の栃木・佐野から各地へ移住したことによって、その鋳物造りの高い技術の伝承が行われたか等について理解することができた。

天明鋳物の作品は、国や県・市町村の文化財に指定されているものも多く、東日本一帯に広く見出すことができる。名声を得ている茶の湯釜はもちろんのこと、梵鐘等の作品もすばらしく、その伝統と技術が長く受け継がれることを期待したい。

### おわりに

御鋳物師会の会員の中には創業800年という方もい

る。御鋳物師会の会員の方々と触れ合うことで、ものづくりの基盤である鋳物造りの古くから積み上げてきた技術は、コンピュータ全盛の現代においても、代替の効かないものづくりの心を秘めていることをあらためて実感した。

しかしながら、現代の経済活動の中では、いわゆる芸術品ばかりで生き残りを図ることは多くの場合は困難である。天明鋳物の製造を生業としてきた鋳物師が少なくなっているように、地域の伝統工芸品産業と呼ばれている分野が一部を除いて多く廃業に追い込まれている現実をこれに物語っている。

鋳物に限らず、素形材分野全般には造形という“素材を人々の生活等に必要な姿・形状に変えていく”という工程がある。このものづくりの基本中の基本が一般の人々の目にとまらなくなっているような気がする。

昨今の素形材製造の多くは、型を用いて同一形状のものを大量に生産するという工程が中心で、要素となる生産技術に対して、改良に改良を加えて現在に至っている。この工程から生れてくる造形品は、自動車をはじめとする大量の部品を組み上げた最終製品の中に埋もれてしまっている。部品の一つでもいい加減に造られたものがあれば、システムとしての全体が十分に機能しなくなるのであるが、わが国の製品にはそうした不安を感じない。

わが国の素形材産業は大量生産を極めていく過程においても、一品一品の高い品質を維持するという精神を貫いてきた。その点から見て、わが国の伝統的な“ものづくりの心”は現代も引き継がれていると言って良い。しかし、後継者人材確保といった面から見ると、世間一般の理解度という点には課題が残っている。

御鋳物師会に参加すると、あらためて日本のものづくりの伝統の心を感じる。これは集まっている方々が、本当にもものづくりが好きだからに違いない。

視察後の懇談会では、鋳物造りの心を大切にして、広く一般にも身近に感じてもらうために“鋳物の日”をつくったらどうかと言った話も出た。色々な分野で多くの記念日があるにもかかわらず、1千年以上の伝統のある鋳物造りに全国的な記念日がないという。古くから鋳物の特産地として知られる桑名では、鍛冶・金属工業の祖神を祀り、11月8日に“ふいご祭”が行われると聞いている。11月8日は全国的にも似たような行事が行われているとも聞く。11月はちょうど素形材月間でもあり、“鋳物の日”もぜひ素形材月間に決めてもらいたいものである。